

進化論理論の一展開

—伊東 重の「養生哲学」の成立とその実践—

相沢 文藏

ま ち が き

伊東 重へ安政四年（一八五七）—大正一五年（一九二六）— 弘前藩医の出、東奥義塾をへて明治一九年東京大学医学部卒、帰郷して家業をつぎ病院開業、かたわら地方の啓蒙的文化活動に従い、後輩医師の指導をなし、また進化論的人生観にたつた「養生哲学」をまとめる。その実践として「養生会」を設立し、「東門会」を指導した。自家の営業のほか、青森病院長、県医師会長等を兼任。明治三五年、政界刷新をさげんで政界入りを表明し、「市政刷新会」を結成した。大正二年弘前市長、六年政友会に入党して代議士当選。その任期中に官立弘前高等学校の設置に貢献した。大正一三年政界隠退を宣言し、一五年かねて念願の欧米旅行にのぼる。その途上同年八月五日、パリにおいて客死（七〇才）。著書に「養生哲学」等がある。

—弘前市史（明治・大正・昭和編）による。

明治一〇年代に生物進化論が我が國に始めて伝えられ、東京大学を中心に、単に生物学にとどまらず、広く社会科学の領域に至るまで深刻な影響を与えられた。この生物進化論学説は、それになされた学者知識人によって、人間の社会関係や政治の面にもそのままに適用されることにより、彼等の人生観や社会、政治理論にまで反映されるに至ると、それはいわゆる社会ダーウイン主義として各方面にさまざまな波紋をまきおこした。ことにそれが、時の自由民権運動に制約を加えようとした官学御用理論の支柱となるに及んで、これをめぐって論争がかさねられ、明治思想史とくに政治思想史をかざる一つの偉観がみられた。

この一〇年代に東大医学部に学んだ伊東も、この進化論学説にふれたのを契機に、それを人間の世界に適用し、医学知識や体育理論、さらに医師としての日常体験等をおりこむことにより、古くからの漢語である「養生」に新しい意義をもちこみ、「養生哲学」という独特の内容

をもつた進化論的人生觀をあつ出した。さらにそれをもつて人間の社会關係を解釈し、さらに國際關係や人種問題にまで適用しようとした。そしてこれを單なる理論的思辨におわらせることなく、青少年教育や社会教育等の實際の場に応用し、実践活動によってたしかめつつその理論を發展せしめ、地元に大きな足跡をのこした卓充分に独自性を主張するものであつた。

伊東は繁忙な医業に従いつつ、学生時代に自らの課題とした向題に生涯をかけてとりくんだが、時の主流的な孝説や思想を豊かに摂取しながら、時代的環境のなかで自らの思想や理論を形成し、發展させていった。ここでは一般には知られること少いと思われる伊東の「養生哲学」を形成の経過をたどりながら、その意義をさぐり、あわせてその実践活動の検討におよびたいと思う。

一 「養生哲学」の意義

「養生」という用語は古くすでに孟子等の漢籍に見え、本朝においても貝原益軒の「養生訓」などによって一般にも日常的に使用されてきたところである。その意味は、単に肉體を養うという身体的なものにとどまらず、心性的なものをも養うことを意味し、そこでは身体的なものと同性的なものを互いに離すことの出来ぬ相関關係においてとりえていたことがわかる。

明治に入って西洋医学が普及し始めるに従つて、従来

の皇漢医学における「養生」も新しく見直され、その内容にも当然新しいものが入りてくるべきものであつた。明治六年、文部省は、「生徒養生の法」を示して小学教育の教材にさせており、この頃から新聞にはしきりに「養生のすすめ」、「養生小言」のたぐいの記事が見え始める。地方については、明治一二年、青森師範学校は「養生小言」という小学採用の教科書の編さんをしてゐる。いずれも西洋医学の知識や新しい衛生思想を普及せんとしたものであつたが、そこには新しい時代に即した「養生」の指導理論はまだ示されていなかったといふことが出来る。

医学修業の決心をかためて明治一二年東京大学医学部に入学した伊東重は、この古い漢語の「養生」について思ひをひそめ、これに人生論的な問題意識をよせ、自らの課題としてこれをとくんとした。ここいらの事情については伊東自らのべているところにきこう。

「養生とはいかなるものにして、その目的は如何なるものなりや。吾人々類は何故に養生せざるべからざるやとは余の大学に在りし時より屢々腦裏に往來せし疑問にして多年解釈を試みて得る能はず、偶々モールス氏の進化論を聞き少しく悟る所あり。」^①

伊東は、その頃理学部において生物学を講じていたモ

は優勝劣敗、適者生存の生存競争を通して進化してきて
ことを学びとった。伊東は、この進化論の教える諸法則
を直ちに人間社会にも適用し、そこにも生存競争が行わ
れ、優勝劣敗、適者生存の鉄則が存するものとみた。こ
の生存競争に勝ちぬく途を教えるものとして「養生理論」
なるものを考究しようとしたのであった。

生物界を支配する法則をそのまま複雑な人間社会に適
用したのは、伊東の場合にとどまらず、当時の東大系の
学者達に多かれ少かれ一致して見られたところであつた。
この生存競争による優勝劣敗の理論を人間社会に適用し
たことについて伊東はいう。

「抑も進化論一タヒ出デシ以來、生存競争、優勝劣
敗ノ理ノ生物界ヲ支配スルコトハ昭々火ヲ見ルカ如ク
少シク教育アルモノハ決シテ之ヲ疑フモノアラサルヘ
シ、然ラハ吾人人類ノ此向ニ慮スル亦必ス競争ノ利器
ナカルヘカラス……之ヲ大別スレハ之ヲ資力・体
力、脳力ト名ゲ之ヲ總括シテ人類ノ競争カト称セン……
……吾ニ此ノ三カヲ有スルノミヲ以テ足レリトスヘカ
ラス、亦必ス此三カニ余裕ナカルヘカラス。」^②

「生存あれば競争あり、草木昆虫より鳥獸人類に至
る迄皆然らざるはなし。吾人人類も地球に生
生存して生物界の一部分をなす焉くを競争なきを得
んや。己に競争あり。又從て競争の利器なかるべから

ず。……余曰々患者の病床に臨み親しく之を療する
に、其の治不治死生皆な競争利害の優劣に因せざるは
なく……吾人人類の競争利害は鳥獸の如く単純なら
ずと虽も、其の最も生存競争に適するものを抽象して
大別すれば、資力・体力・脳力（心力）の三者に過ぎ
ざるべし。今之を總括して人類の競争力と名づく。」^③

「今資力に餘裕を生ずるの道を養賤と名づけ、体力
に餘裕を生ずるの道を養体と名づけ、脳力に餘裕を生
ずる道を養神と名づけ之を總括して養生と名づく。」^④
このように、餘裕といふことをしきりに強調するとこ
ろから、「養生哲学」は別に「餘裕哲学」とも称せられ
ることがある。ついで、この餘裕とはなにかについて
物理學における「エネルギー不滅の法則」をもつて説明
する。

「余の所謂餘裕なるものは、位置のエネルギーにし
て……他日競争の時に当りて之を運動のエネルギーに
變じ以て劣敗の禍を免れ優勝の勢を制し得べき勢力の
保存なり。而して腦力体力資力の互に相変通し得るは
各種のエネルギーの互に相変通し得るに異ることなし。
進化論の所謂遺伝及び応化も亦た餘裕の理を以て説明
することを得べし。」

次に倫理道德についても進化の理をもつて説明する。
「人類社会には競争なき能はざるを以て、競争は人
道にあらざるとして避け得べきにあらず。故に吾人々類

は唯まさに人道に合すべき競争を行うのみ。身を立て道を行い、名を後世に顕わさんとし若しくは徳行を励み、慈善を積むも亦た一種の競争にあらずして何ぞや。

……余は是等を無形若しくは智力的の競争と名づけん。これに反して殴打争才等は有形若しくは感力的の競争と名づけん。^⑥

これら無形、有形の競争は更にそれぞれ積極的もしくは陽状の競争と消極的もしくは陰状の競争にわかれる。

「陽状の競争といひ陰状の競争といふも始より別物にありずして、陰状の競争は陽状の競争より進化せるものなり。畢竟文明といひ開化といふは、競争が陽状感力的より陰状感力的に移行したる形式を名状するに外ならず……倫理道徳を以て悉く競争と言ふこと能はざる場合ありとするも、競争を以て悉く倫理道徳に反するものとすべからず……競争の意志なきが如く見ゆる徳行も仔細に之を吟味すれば、殆ど皆其の始は競争の動機に発して漸々進化したるものにあらざるはなく……人間社会も亦た其の幼稚の時に於ては陽状の競争のみ行はれ、漸く生長して開化の域に進むに從ひ陰状の競争を励むに至りしは、猶ほ一個人に於けることなり。^⑦

……よき発想は次のような言辭となる。

「釈迦の慈悲孔子の仁耶穌の愛は陰状の競争の極致にして、人若し自ら奮ふて此の域に達せんと競争努力

するあらば、其競争や崇高にして世の師範とすべく……陽状卑劣の小競争を戒めて陰状高尚の大競争を教ふべし。^⑧

人類の競争三力としてあげた資力・体力・脳力の三者の關係については次の如くいふ。

「猶ほ耶穌教の三位一体の如く仏教家が戒定慧の三徳を論ずるが如く、又心理学者が心の智情意を説くが如く人身体も亦た三力一体の結合体なれば強いて一力を分離する時は他の二力も存在すること能はずして、一力滅亡すれば他の二力も亦た滅亡せざるを得ないものである。^⑨

「資力・体力・脳力の競争三力は更に大きくは國家・民族・人種の競争三力となるは余の信じて疑はざる所」

として、「國家と養生」、「人種と養生」の一節を設け、この養生理論を國家關係や民族、國際關係にまで適用すべきものと主張する。

以上頌をいとわず伊東の述べる所から、その骨子と考えられる箇所を引用した。これらの思想は、進化論理論を基底とし、人間社会をもそれを以て割り加らうとした当時流行の社会ダーウイン主義の一例にほかならぬ。伊東は当時この立場を代表した東大総理加藤弘之とは特殊な關係にあり、思想的栄養を加藤から充分に摂取したことが考えられる。伊東の独創になるところは、それに医

師としての日常経験をまじえた医学上の知識をもって裏づけをなした点である。加藤弘之との関係については後にふれることにしたい。

伊東の主張した「養生哲学」は決して深遠な哲理をふくむものではなく、「人生いかに生くべきか」という處生訓又は人生論にとどまり、「哲学」という名にふさわしいものではないことがわかる。伊東自身もこれを気にしていたのであり、次のような釈明を行っている。

「哲学の名を冒したる所以は敢て高尚の哲理を述べたりとの謂にあらす。世間の注意を喚起して養生に就て一種の理を構成したるものなることを知らしめんとの微意に外ならざるなり。」^⑩

卑俗にわたる事にまで「哲学」の名を冠するのは明治年向から既に見られていた一種の流行であり、伊東としては、あくまでもその主張の普及化を願ったことに発した命名であった。

このような伊東の「養生理論」も決して一朝一夕に成ったものではなかった。伊東は医学書生時代にはじめていだいた向題意識を生涯失うことなく、繁忙のうちに絶えず思いをひそめ、講演や新聞への寄稿等によって機会ある毎にその理論の普及を心かけた。またこれを刊行して広く批判を仰いだるが、それを次々と増補して大正一五年即ち伊東の没した年に最終的な決定版を出した。これを見たのちに宿願の欧米旅行に出た。この旅行は「養生

哲学」の海外普及の目的をもちかねていたといわれる。

伊東の思想的発展の経過をみるためには、刊行された小冊子の本文を対照しつゝ見てゆく必要があるが、それらの刊行順序は次の通りである。まず、明治二五年七月弘前教育会総会において始めて「養生」に関する講演をなし、ついでその趣旨を「養生新論」と題して印刷にふして知人の間に配布した。翌年一月、東興義塾の磯岡雅誌「東興」才七号にこれを特別附録として添付して義塾の学友達に頒布した。ただし、これは前者に対して多少の増補を行ったものである。これは二〇教育の小冊子ながら伊東の思想の基本的なものは一応もられている。ついで思案をかさね、三〇年には大幅に手をいれて、「養生哲学」として東京南江堂から出版し、四〇年には訂正増補して才二版を出した。大正一二年の関東大震災を機に、さらに増補して、大正一五年四月、「養生会」を発行元に、「養生哲学通俗講話」として決定版を出した。これをもって改めて、この書は伊東の一生一代の血肉の書であることがわかる。この決定版も、「養生哲学」をやや平明な文章をもって敷衍したものであるが、時代の思想にも眼をくばっていることがわかる。例えは、それはクロボトキンの相互扶助論に対する見方においてもうかがうことが出来る。クロボトキンの思想は大正時代に入って紹介されて一変紋を投じたが、伊東にとってこれは新しい問題であった。これについても伊東は、

「生物進化は生存競争によるにあらず、相互扶助にあると説く説あるも、相互扶助も生存競争の一形式に外ならず。競争の意志なきが如く見ゆるも始めは競争の動機に發し、その進化したるもの」^②と説いて進化論的立場をこども明かにした。

伊東の「養生哲学」は、名は哲学ながら、その頃の弘前士族の子弟達に与えようとした「人生いかに生きべきか」の人生訓にほかならなかつた。伊東としては、「今や地方の少年輩曰を逐ひて精神軽薄柔弱に流れ、滔々たる頽勢を視するに忍び」ざるものがあり、彼等に新しい時代に生き抜くための人生指針を与えようとしたのであつた。

明治一〇年代から二〇年代の始め頃にかけて地元弘前の町は種々の条件がかさなつて衰退の底をへき、弘前士族の没落すべきものは没落して離散し、その意味では一應の整理のついた時期であり、士族屋敷の町屋への変貌は珍しからぬ景観であつた。そしてこの頃の士族の子弟の精神的状況は無氣力と退嬰の言葉につぎるといつてよいものがあつた。町道場を據拠として失われた士氣をとりもどそうとする動きもあつたが、それは何等精神的な指導原理をもつものではなかつた。またこの頃の地元出身で有能な者はすべて地元をすて、伊東のように学成つて帰郷するというのは希有の例外といつてよかつた。當時の士族の子弟達は向うところを知らず、よるべき人生

の指針を与えられることなく、適切な指導者をも見出し得なかつた情況において、伊東はこの要請にこたえようとしたのであつた。

このような情況において、日清戦争前後の国家主義思想のたかまりは青少年達にも強力な刺戟を与えるものであつた。「國弱ければ民辱しめらる」という危機意識は彼等の向にも高揚し、義勇団を組織して従軍を願ひ出る動きもあり、また伊東がのちに直接指導することになつた身神鍛錬のための早起会を始める動きも見られた。このような時期において伊東の養生理論は、青少年の士氣を鼓舞するためには素晴らしい魅力をもつものであつた。時の人間が個人的にも、ひろく國際的にも競争場裡にたたされていくという危機意識がそれをささえていたのである。競争理論にたつ養育と養神のほか、賦的に破たんすることの多かつた時の士族の養育、これを強調した養生理論はこの頃の時代的背景を考へることなしには理解し難く、それはまた、その当時の精神的雰囲気をおびているのも当然のことであつた。

① 「養生哲学」才二版 明治四〇年 六頁

② 「養生新論」 明治二六年 三頁

③ 「養生哲学」 三十一―三二頁

④ 同上書 三十四頁

⑤ 同上書 四十二頁

⑥ 同上書 四十四頁

⑦ 同上書 四十七—五十頁

⑧ 同上書 五十一頁

⑨ 「養生哲学通俗講話」 大正一五年 20頁

⑩ 同上書 21頁

⑪ 「養生哲学」 二十八頁

⑫ 「養生哲学通俗講話」 41—42頁

⑬ 「養生哲学」自序 三—四頁

二 「養生新論」の反響

伊東は明治二五年、弘前教育会においてなした講演の要旨を早速印刷にふし、「養生新論」と題して知人達に頒布して批判を仰いだ。この時はごく小範圍に限られたらしい。これは当時どのように迎えられたであろうか。まず竹馬の友陸羯南は、早速一読して感想を送って激励した。その書翰は、羯南がその頃強い胸心をよせていた国際關係を觀察する立場を表明しているので要旨をぬいてみよう。

「……………貴著養生新論一篇……………一読之虚大に其の至論に感服仕候。人間社会の競争に三力有り生理力

(Force Biograpkique—biologiqueの誤か—相次)

賊理力(Force economique)、心理力(Force morale)。

是は小生政の考より撰採せしものに候而実は国際学と申す一種の学理を構成せんと爲に材料採集に從事中、去る八月中旬に一寸新尙の社説に三回掲出致候、即ち

別紙(対外策階梯)渾一読被下べく候……………今回貴著を讀むに一回と一人との差別こそ有之候も全く小生の愚考と符合、甚だ愉快に奉存候……………御送りの一書簡簡明に御座候へは是れにては未だ拙論に訴ふるに足らず今一層御敷衍被下はば尊統上に掲載なく世上に示し可申候……………今一層御研究世上に御向ひ被成度……………小生は此の三力を國際の間に正果して説明すべし貴兄は個人交際の高に御説明被下度候……………」

(明治二三・一二・五付書翰)

これによれば羯南はかねてから国際關係の動きを汲るにあたり、各國のもの生理力(生物学的活力—体力)、賊理力(経済的活力—資力)、心理力(精神的活力—腦力)という三つの観点から考察しようとしていたのであり、これは、羯南のこの頃の一厘の國際論を理解するための手がかりとなるであろう。伊東は、この人間個人間と國際間と次元を異にしながらも、羯南の考えとのこのはからざる符合を喜び、「是れ皆な時勢に促さるるに依るものなるべく同一の刺戟に對して同一の反応を呈したるものと見て教て奇とするに足りざるべし」となした。

伊東の先輩というよりは教師筋にあたる本多庸一はこの頃青山学院長であつたが、本多も、二五年一二月の「青山評論」において紹介しかつ批評を加えてくれたという。更に本多との關係についてふれると、本多は、明治二八年に米國旅行から歸つた時、弘前にも帰省した。そ

の折本多を訪ねて、談話またま養生論に及んだ。本多は、米國旅行中、有名な伝道師ウィリアム・テーロール氏 (Taylor, William) のこと、一八二九—一八九五、英國出身、当時アメリカにあって活躍した組合派の指導的伝道者—相沢) の演説をきいたが、そのなかで、伝道の成功のために三つのMが必要である。即ち金力 (Money)、体力 (Muscle)、精神力 (Mind) がそれであるといつた。それをきいた本多は「余 (伊東) の養生論に符合する所あるを以て面白く感じたりと語れり」といふ。翌二六年六月には、「東京医事新誌」から掲載を求められ、この雑誌に四回にわたつて連載された。同年秋、鶴南は主宰する新聞「日本」の論説欄に数日にわたつて掲載してくれた (その月日は未調査のため不明—相沢)。このような友人や先輩の温かい声援によつて大いに力を得、いよいよ「養生学」の仕上げを急ぎ、三〇年には、「養生新論」の増補というよりは全く稿を改めて東京南江堂から「養生哲学」を出版し、広く全国的に批判を求めた。

のまま剽竊したものだと言つばぬいた。これがもとで新聞の間にやりとりがあり、「北陸新聞」の辯解として、この記事は高知の「土陽新聞」に掲載されたものを承諾を得て転載したものだとなした。これらの事は、金沢に居住する伊東の友人が報告してくれ、その新聞紙も送られてきた。そこで伊東は、高知在住の友人に頼んで、「養生新説」をのせた「土陽新聞」を送つてもらつて読んだところ、「養生新論」と一字一句も違はないことがわかつた。「土陽新聞」がはじめ伊東の名をいれずにかつても無断で掲載したには理由があつた。「養生新論」に接した医師たちがその内容に感心して世間に紹介したり、それを他人に貸して転写されているうちに、それが新聞社の入手するところとなつて伊東の名が出ずに、本文だけが掲載されることになつた事情がわかつた。伊東はこのような自分の苦心の著が反響を生じたのを「余はもとより之を追求するを欲せず、唯拙論の広く高知、金沢地方に紹介せられたるは窃かに喜ぶ所なり」とした。

伊東はこれらの反響に力を得て、「養生哲学」を南江堂から出版したが、この版元はその頃から医学書出版において名があり、伊東の著書は全国的な普及を見ることになる。そして少くとも、全国の医師の間では、伊東の「養生論」を知らざる者はない程に有名となつていった。なお鶴南と伊東との思想的関連にふれるならば、鶴南は親友伊東の「養生新論」には一応の賛意を表しながらも、

複雑な人向社会の人事に進化論理論を適用し過ぎること
に對して批判的であつたらしいことは、羯南の次のよう
な発言にもうかがわれるが、正面きつた伊東批判は見ら
れない。

「離合聚散生滅存亡は一切皆な天則の支配に任さん
と欲し理化学の法則を人向社会に應用せんと欲するは
是れを進歩主義の真面目にして……」④。

「人類を動物的に待遇して物質的法則に固着する進
歩主義は此に至りて更に一考を要するのは時代に遭へ
り。」⑤。

①「養生哲学」 十八頁

②同上書 三十六頁 ほかにも同様のことが次の新聞記
事に見える。「東奥日報」、明治三二年一〇・七

伊東里「養生百話」(三)

③同上書 二十六頁

④明治文化全集、政治篇 陸羯南「稟政」五三七頁

⑤同上書 五四〇頁

三 進化論の受容

伊東里は東奥義塾草創の頃の俊才の一人で、明治五年
義塾創立と共にこれに入塾し、明治七年暮から一一年に
かけて義塾に教鞭をとつた米人宣教師J・イングの指導
によつて始めて西洋の学問にふれることが出来た。イン
グの教授内容は、英学はもとより、歴史等の文科系から

理科一般に至る広いもので、伊東は、当時としてのそま
得る最高の一般教養を身につけることが出来たととしてよ
い。ついで、イングの教化により、明治八年六月、学友
十数名と共に集団的に洗礼をうけ、基督教への入信を明
かにした。イングは騎兵少佐として南北戦争にも参加し
た経歴をもつた典型的なピューリタンであり、草創期の
義塾生に對して生涯抜くべからざる深刻な人格的影響を
与えた。イングの住居と伊東宅は路地一つへたてた近さ
であり、イングは朝食前二時間位も散歩に出る習慣があ
つたので、伊東はいつもお伴をしたといわれ、イン
グの伊東に与えた教化は殊のほか大きかつたと考えられ
る。後に伊東は少年達に早起きと体育を奨励したのも、
この頃の体験がもとになつているとも考えられる。つい
でにのべると、明治九年七月、明治天皇の東北・北海道
御巡幸のさい、義塾の生徒代表はイング等の教師と共に
青森で奉迎した。そのさい、殿下の教育奨励のための行
事があり、伊東は他の二名の学友と英語による御前講演
(正しくは当時の英学生がよくやつた名文暗誦のこと―
相沢)を行つて金五円位の御下賜金をうけた。ともあれ
伊東は明治一二年東大に入塾したのちも外人教師の英語
による専門講義を充分理解し得るだけの語学力と一般教
養を身につけていたとすることが出来る。

伊東と同時に、同じく東奥義塾から東大に入塾した学
友に岩川友太郎がいた。岩川は理学部に入塾して生物学

を専攻し、のちに動物学ことに貝類学の開拓者として学界に名を残した人物である。米国の動物学者E. S. モールズ(一八三八一—一九二五)は明治一〇年から一二二二にかけて日本に滞在し、その向東大理学部に御雇教師として我が国における最初の動物学者達を養成し、ターウインの進化論を普及させたり、大森貝塚の発見など各方面に新しい学問を紹介した功は大なるものがあつた。伊東は岩川との関係によってモールの講義に出席することとなる。これについて伊東は次のようにのべている。

「余の大学に在りし頃、偶々モールズ氏の進化論をきき少しく憚る所あり。モールズ氏は先年東京大学にて生物学を教へ……傍ら進化論を始めて我國民に鼓吹せし人なり。当時友人岩川友太郎氏は同氏に就て生物学を修め居りしを以て余も亦た同氏の厚意に依り屢々其の講義に列なり、生存競争、優勝劣敗、自然淘汰の理を聞くに及んで……」①

この時のモールの滞日期間は短かく、一二年の末には帰国している。従つて伊東が岩川に紹介されて動物学の講義をきいたのは、伊東が東大に入学したこの一二年のことであろう。モールの滞日日記(Japan Day by Day)に石川欣一記日本その日その日(彼の幅の広い活動を伝へ、また彼の眼に映じたその頃の風俗慣習などを極めて興味深く描いている。彼は教室における講義や実験の指導のほか、全学一般講座やその頃東大がよく開

催していた市内における公開講演などにも喜んで参加し、とくに進化論の普及に力をいれた。これについてモールズはいう。

「米国でよくあつたような宗教的な偏見に衝突することなしにターウインの理論を説明するのは誠に愉快であつた。」②

ターウインの「種の起源」(一八五九年)の発表と共に、それは帰結としては神の存在を否定することにあつた故に、科挙と信仰の対立が再びもしかえされ、教会側から猛烈な抗議がなされるに至つた。米国においては、この書は禁書とされている地方もあつた程で、そこでは公然と進化論を語るのは勇氣を要した。基督教的に未開であつた日本においては、安心して説くことが出来たのみならず、やがて進化論理論は一世を風靡する程の影響をもたらすことになつた。基督教徒例から批判が加えられるのはしばらく後のことである。ともあれ、明治八年、東興義塾にあつた頃、伊東は受洗して一応基督教への入信を明かにしたが、彼は何の精神的動搖をも示すことなくこの進化論にふれたことは明かである。これは単に伊東の場合にとどまらず、その頃の知識人や基督教徒の精神的姿勢をよく表明するもので、彼等は基督教をも文明開化の思想的表現の一つとして受容したに過ぎなかつた。基督教を受容してこれを真にわがものとするためには、内村鑑三の場合に見られたようなパウロ的に深刻な精神

革命をへなければならなかつたのであり、これは希有の例といつてよかつた。伊東の場合、基督教的影响ありとせば、それは典型的なヒューリタンといつてよい。丁・インスのヒューマニスマチックな人格による影響にとどまつたとしてよい。

伊東はモールスの講義に列して生物進化論にふれることにより、生物界における生存競争、優勝劣敗、自然淘汰などの理を学びとつた。そしてこの生物学上の法則を直ちに人向社会の問題に適用し、人向をも生物学的に、しかもその及びによつて理解し、それを手がかりとして、彼なりにかねて問題意識をいだいていた「養生」の問題を考察し、それを展開せよとした。このような方法論は決して伊東だけのものではなく、当時の学者知識人、とくに東大系の学者一般に多かれ少なかれ見られたところであつた。

モールスと殆ど前後して東京大学には哲学教師としてE・フェノロツサ（一八五三—一九〇八）がモールスの推薦によつて迎えられて教授にあつた。彼のもとで哲学を専攻し、明治一三年文学部を卒業した井上哲次郎は次のように云う。

「彼は哲学のほか、当時外国教師に底なるため、政治学、経済学の講義をかねた。同氏の哲学に關する講義はどのような傾向のものであつたかと云へば、英國経験派の学説を述べると同時に……最も進化論に重き

をおいたのである。而してヘーケルの哲学を講ずるにあつては……これとスペンサーの唱導するメーイン主義の進化と結び着けようと頗る努力した。」^③

「フェノロツサ氏も進化論者であつたが爲に進化論は当時俄然流行を來たし、殆ど我が学界を風靡する勢であつて吾々学生も非常な興味をもつて之を研究したものである。」^④

これらの外人教師の及ならず、すでに外山正一、矢田部良吉等は欧米留学をおえて歸つており、いずれも東大において進化論をとらえていた。進化論理論を人向社会にも適用し、これをもつて社会や人事の動きを説明しようとしたのは決して伊東の及ではなく、少くとも当時の東大における主流的な傾向であつたとすることが出来る。そしてまた、進化論にふれることにより、それをもつて人生觀や世界觀までも再形成しようとして試みたのも伊東一人ではなかつた。その最々よき例を当時の東大総理加藤弘之において見る事が出来よう。

- ① 「養生哲学」 六頁
- ② 石川訥著「日本その日その日」昭和一四年、一六一頁
- ③ 井上哲次郎「懷舊録」昭和一八年 二〇〇—二〇二頁
- ④ 同上書 二〇二頁

四、加藤弘之との關係

以上のように東京大学を中心として進化論理論が一世

を風靡する勢を示していた明治一〇年代における東京大学の最高責任者は加藤弘之へ天保七年（一八三六）―大正五年（一九一六）までであった。加藤は大学の前身の蘭成校時代から引続いて総理の地位にあり、総理とはのちの東大総長にほかならなかつた。外人教師の任用等は勿論その権限にあった。一〇年代の末、初代文部大臣森有礼との意見の不一致から一時その職をひいたが再びその地位につき、明治二六年に至るまで、要するに東大の創建からその整備発展の時期を通じて主導力となつた。加藤は若年の頃ドイツ語を学んでその文化に傾倒し、ドイツ国家主義とその上に立つ立憲政治思想の最初の紹介者ともなつた。始めから官学者の姿勢を明かにしていたが、ドイツ啓蒙思想にもふれており、その限りに於いて天賦人權、自由民権論をも理解し得たのであり、それにもとづいて「真政大意」（明治三年）、国体新論（同八年）においては、自由民権論にたつて立憲政治の解説を試みている。官学者としての限界を守りながらも啓蒙的役割を果した卓特筆に値するもがあつた。

当時の外来思想は、すべてそれを自らのものとして消化する以前の直訳思想にほかならなかつた故に、これらの著書の中には、後年の加藤が表面する程に進歩的な、仏革命時代の「人權宣言」や米國独立革命のさいの「獨立宣言」の文句がそのまま抜け出してきたような言辞^①があり、自由民権家にすい喜の涙を流させるものがあつた

ことは極めて興味深いところである。しかし、この加藤は僅か数年の後に、進化論理論にふれることによつて洗脳され、かつて唱えた天賦人權論は妄想であり、これに唱えたのは若気のあやまちとして不明を天下に釈明することになるのである。これまた明治思想史を通じての一奇観とせざるを得ない。

東京大学にモールスやフェノロツサを招聘した責任者は結局加藤弘之にほかならなかつた。加藤はこの思想的転向は決して速急になされたのではなく、進化論にふれる以前に「自然科学に依拠せざれば何事も論究する能はざることを感じ」ていたという。そしてこれを教えたのは「英國の陶化史の大家バツクル」で、「その著書をよんで所謂形而上学なるものの殆ど荒唐無稽なることを知」つたという。自然科学の研究法を歴史研究にも適用しようとしたH・T・バツクル（一八一―一八六三）の英國文明史にみられた野心的な史観が、明治陶化期における我が國啓蒙主義指導者達に与えた影響は甚大なものがあり、加藤もその一人であつた。実証的な科学的文明史観にたち、自然的条件を重視することによつて人類進歩の法則を明かにし得るとしてバツクルの情熱的野心は甚だ魅力的なものがあつた。これによつて科学的実証主義の立場をかたむけることが出来たと加藤は云っているのである。進化論を受容し、これを人間世界の人事にまで適用せんとする準備は、加藤においてはこのようにしてな

された。

加藤自身はモールズの教室における講義に出席したとは考えられないが、公開講座や一般的な講演においてその言説にふれる機会があったのであり、ほかに直接的に交友をあたためる機会はしばしばあったと考えられる。モールズの日記に次の記事がある。

「(一八七七年)一月二十九日(月曜) 夜には大學総理ドクタア加藤が昔の支那学校(聖堂のことか)一訳者)の隣の大きな日本邸で私のために晚餐を喫いてくれた」^③

モールズの説いた進化論は、それをあくまでも生物等の問題として扱っており、これを人間社会に適用するに至らず、その限界線を守っていることは明かである。^④

しかるに加藤の場合、直ちにこれを人間社会に適用して社会ダーウィン主義の途を明かにするのである。加藤はこれについて次の如きいう。

「萬物法ノ一個ノ大定規タル優勝劣敗ノ作用ハ特ニ動植物世界ニ存スルノミナラス、吾人人類世界ニモ亦必然生スルモノナルヲ了知スヘシ。」^⑤

「コノ優勝劣敗ノ作用ハ吾人人類野蛮未開ノ太古ヨリ遂ニ文明開化ノ今日ニ至ル迄未ダ曾テ滅スルコトアラサルノミナラス恐クハ吾人カ此地球上ニ存在スル限リハ億萬歳ト虽モ滅スルノ期アラサルベシト信ス。」^⑥

「之ヲ要スルニ此優勝劣敗ノ作用アルニ非サルヨリ

ハ莫ニ吾人社会ノ開化ヲ進メ文明ヲ促スコトハ到底望ム可ラサルナリ。」^⑦

「耶蘇ヲ始メ凡ソ聖賢君子ト録セラルル人々ト虽モ皆此競争勝敗ニ従事セサルハナシ。何トナレハ是等ノ人々カ自ラ正理公道ト信スル所ヲ主張シテ所謂魔法外道異端邪説ヲ排撃セシハ是レ全ク優劣兩者ノ競争勝敗ニ外ナラサレバナリ。」^⑧ (これらの言説を前記伊東のそれと比較せよ)

このように加藤は、進化論理論をそのまま人間社会に適用したのみならず、それを永劫にかわりざる真理なりと主張する。倫理道徳についても優勝劣敗の立場によって説明せんとするのである。加藤はこの新しい立場にたつて彼の旧説を精算し、生存競争が行われ、優勝劣敗の原則によりて支配される人間社会においては自由平等などはあり得べくもなく、不平等こそ人間本来の姿であり、従つて天賦人權説は妄想であり、屋氣樓の如きものに過ぎぬ。

「人ヲシテ一時其奇ヲ悦ハシメシモ既ニ消滅滅盡ノ時到来リ。今ヨリハ到底之ヲ維持スルノ術アラサルナリ」^⑨

と主張する。

このようににはげしい攻撃的言辭が全巻にみちている「人権新説」を公刊して加藤の新しい立場を明かにしたのは、明治一六年一月のことである。この問題の著書が世

に出るや否や自由民権家達は一斉にいきりたち、矢野之雄、馬場辰猪、植木枝盛等は早速一連の論駁の書を相いで公にし、加藤もまたうけてたへなど、又のり多い論争が展開されることになるのであつた。このようない時期において、伊東は専攻の医学に専念しつゝ、かねて問題意識をよせていた「養生」についてひとりで思索をこらしていた。

さて伊東が東大医学部に在学中の学友に加藤照磨へ元治元年（一八六四）〜大正一四年（一九二五）なる人物がいた。これはほかならぬ時の東大総理加藤弘之の長子で、恐らくは卒業をまたずに明治一七年ドイツ留学の途にのほつてゐる。相当長期にわたる留学を終つて帰朝後は宮内省に入り、明治天皇の侍医になり、父加藤弘之は、明治三三并功によつて男爵を授けられ、大正五年没したのちは男爵家の当主となつた。ドイツにおいては、彼より多少早く留学してゐた鳴外と親交をあたためてゐることなどその動靜は鳴外の「独逸日記」に散見するところである。この頃の東大の医学書生たちは、近頃の池の端の料亭で浩然の気を養つたものらしく、この照磨氏はこの賑わいで艶聞があり当時評判になつてゐたことは鳴外の日記（明治一九・五・二八）を通してうかがふことが出来る。さらにはこの向の事情にあわせて加藤と伊東の親交関係は、羯南から伊東あての書翰を通して知るこゝとが出来る。

「……此頃池の端にて蒲田（左のこと、当時東奥日報社長兼県会議員相沢）と飲み候節一妓あり、既に老婦なれども談頗る佳、兩人談話せし際伊東といふことを聞き医学校の伊東さんなれば加藤さん（照磨のこと）相沢」と同伴せし人ならん……」（明治二四・三・四付書翰）

これによつてこの頃から数年前、加藤と伊東の兩人はこの料亭に遊んだことをこの老妓はまだ記憶にとどめていたのであり、彼等の交友関係も想像がつくといふものがある。

伊東はこの学友の照磨との関係において時の東大総理加藤弘之に接近する機会があつたかどうか。面接することによつて親しく教をうける機会があつたかどうか。伊東の書いたものを通じてこれに關した記述は見あたらず、加藤弘之から影響を受けたことについてもふれる所はない。しかし、伊東は親友の父でありまた当時の東大総理であつた所謂「時の人」に対して親近感をよせ、その言行に特別な関心を示したことは充分に考えられてよいであらう。親しく加藤から教養をうけたことを裏ける直接の材料はないにしても、加藤から何等かの影響を受けていると考えてよく、事実、加藤の向題の書、「人権新説」中の発想に一致する点が伊東にも見られるのは（前掲の「養生哲学の意義」参照）加藤からの影響と見てよいのでなからうか。自由民権論争に引續いて、加藤

の著作活動は頗る活発で、それを通して進化論的立場をいよいよ堅持した。明治二二年には個人雜誌「天則」を發行して数年にわたって継続し、二四年、「加藤弘之講論集」、二六年、日独両語版の「強者の権利の競争」、二七年「道徳法律の進歩」を公にした。これらすべてにわたって、伊東への影響如何という観点から吟味するいとまをもたないが、これらを仔細に調べると事情は更に明かになると考えられる次才である。加藤は「人推新説」の中で生物界に通ずる生存競争や優勝劣敗を深い吟味を加えることなく直ちにそれを人間社会に適用して社会ターウイン主義の立場を明かにしたが、伊東もこの立場を自明の真理として「養生哲学」の発想を始めている点は加藤の影響と見てよいであろう。

加藤の「人推新説」に対す反駁は前記の諸家の著書のほか、「人推新説駁論集」(明治文化全集自由民権篇所収)としてまとめられており、甚だ参照に便であるが、その中に例えは次のような発言がある。

「進化論ヲ唯タ之レヲ人類ニ適用スルニ至ツテハ種々ノ異見ナキニアラサルベシ。此純一ナル主義ヲ以テ人固ノ複雑ナル者ニ適用シ而テ其宜シキヲ得サル者」^①
 「進化主義ヲ奉ジ優勝劣敗ノ作用ヲノベテ人事特ニ政治上ノ現象ヲ説明セント企テタルハ単一ノ作用ヲ以テ複雑ノ作用ト同視スルモノニシテ其ノ適用ノ当ヲ得タルモノ」^②

この様な批判は伊東も当然に受くべきもので、伊東の場合には加藤に比して人事面についてはるかにこの様な立場を展開させているだけに肉題は深刻となる。他の生物と異なって自主的な感情をそなえた人間の場合、単純な機械論を以て割り切ることは出来ない。伊東の言葉を逆用すれば、人間は他の生物と異なり、「同一の刺戟に對して同一の反応を呈し」とは限らないのである。また物理等にいうエネルギー不滅の法則をもって人間の資力・体力・脳力の競争三力を説明するさい、それらが蓄積されてくる状態を位置のエネルギーとし、それが必要に應じて発揮された場合を運動のエネルギーに変転したという。しかし、このエネルギーの変転の時期を好むがままに決定するのも、或いはその変転を不発におわらせるのもすべてこれ人間の主体的意志にかかっている。伊東の理論はこのような人間性を無視した一種の人間機械論と見られても致し方ない一面がある。

① 明治文化全集、自由民権篇「国体新論」一二二頁、一三四頁

② 「加藤弘之自叙伝」大正五年 四七頁

③ 石川説「日本その日その日」一六九頁

④ 明治文化全集、科學篇「エドワード・エス・モリス口述」

「動物進化論」明治十六年

⑤ 明治文化全集、自由民権篇「人推新説」三六二頁

⑥ 同上書

⑦⑧同上書 三七〇頁

⑨同上書 三七一頁

⑩矢野文雄「人權新説駁論」明治十五年

馬場辰猪「天賦人權論」明治十六年

植木枝盛「天賦人權辨」明治十六年

この三著とも自由民権篇所収、ほかに「駁論康」

には加藤に対する外山正一の反駁文をも収めてある。外山は当時東大文学部長である。この東大総長と

同文学部長の論争はけだし奇観である。

⑪明治文化全集、自由民権篇「人權新説駁論集」

四一八頁

⑫同上書 四一九頁

五養生理論の實踐

伊東は約束されていた歩進の途をすべてふり棄て、両親の孝養專一のために帰郷して医業をついだ。地方においては、当時東大医学士という肩書は最高のエリートたることを意味した。伊東自身も地方における指導的立場を自覚し、医学衛生思想の普及のみならず、萬般においておかれていた地方住民に対して幅広い啓蒙活動を始めていた。公私各種の会合に來賓として出席することも多かったが、その際は一席の講話を試みるのが常であった。門下の医師達を率いて医学知識普及のための公開講演会

を開いた例も多かった。明治二一年には伊東を中心とした医者仲間によつて、その頃他元においては珍しい程に立派な、その名前にふさわしからぬ「田舎雜誌」という同人雜誌が発行された。それは、医学知識や一般的評論のほか、ドイツ文学の翻譯ものせるという斬新さを発散するものであった。

このような地方における文化的啓蒙運動と平行して、伊東の日頃思いをこらしてきた「養生理論」も漸く熟し、ついでそれを刊行して一般の批判を仰いだことについては先にのべた。ついで伊東は、この理論の實踐運動の守り手として、明治二七年三月、「養生会」という、伊東の門下の医師や町内の有識者を会員とした団体を創立し、毎月一回定期の集会をもつて「養生理論」の研究とその普及にあたることになった。

日清戦争後の國家主義思想が一段と高揚した時期に、士族の有志の少年一二名が自発的に毎朝弘前城の東門附近に集合して早起会を始めた。それは、明治二九年一月一日にはじまるという。彼等にはまだ指導者もなく、よるべき指導理論の用意もなかった。その頃、陸羯南が所用あつて帰郷していたが、少年達は羯南を訪ねて指導を仰いだ。羯南はこの頃、正義硬骨をもつて鳴る新聞「日本」の主幹としてその活動の絶頂期にあつた。羯南は伊東の「養生理論」に対しては全面的ではないにしても

尊意を表しており、躊躇することなく少年達に伊東の指導を求めるように示唆した。翌三〇年一月、早起会の少年達は伊東を訪ねて指導を乞い、まず会名と規則を定められんことを願った。伊東は、東門外に集る故に「東門会」と命名し、会規は上からの服従的なものをさけ、自発的に守るため「約束」とする様にすすめ、その内容の系項を示唆した。「東門会」は会員の自治的な約束によって運営されるという根本原則はこのようにしてきまつた。このようにして「東門会」は伊東の指導をうけることになり、同時に無理なく「養生会」の一部門としての「幼年養生会」となった。「東門会」が「養生会」と結びつくことによって、「養生理論」の実践の場がひろがっていった。この「東門会」は、もとよりこれに参加する会員の類がればかわつたが、この早起活動そのものは今日に至るまで、七〇年に近い期間を通して一日も絶えることなく継続している。伊東は少年達と早起きを共にし直接親しく指導して身心の鍛錬にはげんだ。このような実践活動を医学上の見地をもって裏づけていたので、伊東の「養生学」という実践的な人生論的体育理論は全體的に注目をひくものとなつた。

伊東の主張したような立場を西洋に例を求めるならば、「ドイツ体育の父」と称せられた戸・シ・マートン（一七七八—一八五二）において見出されるであろう。マ

ンはナポレオン軍の鉄蹄にふみにじられ戦災を蒙ること多大であつた祖国プロシヤの青少年達が、戦後精神的に沈滞してなすところを知らない状態にあるのをなげき、体育の奨励によつて士気を鼓舞せんとして体育理論を研究し、体育クラスを全国的に設置するなど、それに生涯をかけた。彼は体育を単に肉体的鍛錬と見ることなくそれを精神的なもの、道徳的なものとの相関関係において主張した点、伊東の先蹤をなすものとしてよいが、伊東はこのマートンの例を知り、これを参考としたかどうか、これを判断すべき材料は全く存しない。

「東門会」は東門外や城内の李丸等に早起集合し、伊東の指導の下に会歌を高唱し、体操や遊戯をなし、これに必ず伊東の講演をまじえた。この会員は増加し、常時出席する者百名を数えることもあつた。年とともに会員の増加をみるに従い、会員の年令的考慮も必要となり、東門会員にして年令一六才以上の者をもつて、新たに明治三〇年一二月をもつて「成年養生会」を組織し、のちには、これに直結する「壮年養生会」（会員の年令二六才以上）も設けられた。一方、「養生維持会」を設け、「養生会」の趣旨に賛同する者をなく求めて賤的援助を仰ぎ、会費（月一〇銭）を徴し、ほかに寄附をのるなどして基本金の蓄積につとめた。当時伊東の構想は、一定の基本金が出来た際はそれをもとに賤団法人の組織を

設立するにあり、そのため会員千名獲得を目標として進んだ。しかるに日露戦争という非常時に際会して、青少年の養体、養神の必要が緊急となつたと感じ、目標達成をまたず、三八年七月、賊團法人の設置にふみぎり、「養生会」の永続的な維持の方法をかためた。

「東門会」の早起活動は単にそれだけの動きにとどまらず、市内一般に反響をよぶに至つた。「東門会」はその当始の住格上、それにのどう者ははじめ士族の子弟に限られ、次才に一般に及んでいった。しかし、地域的には旧城に近い、佑に下町、中町の名を以て總称される城の西方や北方にあたる士族屋敷の多かつた方面の子弟を主とした。明治三〇年代に入ると、この影響をうけて市内各方面に早起会が現れることになる。「商家の子弟から主人に至るまで夫々「朝起会」を組織し、三人、五人、十人と未明に運動を試み……」という当時の新聞記事（東興日報、三二年一〇、二九）も見られる。「東門会」にのぐ大きな早起会として、その頃設立をみた品川町の「養身会」があつた。これは町内居住の小学校教員を指導者とし、会員は町内の中小生百名をこえたとされる。伊東の門下の医師嶋海定五郎は松森町において陶業していたが、その指導のもとに早起会があり、早起会活動はこの頃の全市的な一の流行であつたことが出来る。賊團法人「養生会」の事業として最初にあぐべきは、三九年七月、養生主義に基つた「養生幼稚園」の創立である。

しかし、これは「養生会」の戦的基盤をもつては如何ともしがたく、伊東は多額の私財と広い敷地を提供して成つた。この設立の「趣意書」(弘前新聞、三九年六・二五)によれば、

「惟うに幼児の体育は人生の基礎根帯にして生涯強弱のわかるるところ……幼稚園は専ら体育を主とし少くも優に普通教育に堪え得べき体格を作るを本旨とすべく……戦後益々激烈なるべき競争場裡に立ち能くこれに堪えて優勝者たらしむる覚悟なかるべからず」

この文句は、いかにもきびしい鍛錬を幼児に加えるのを本旨とするかの如くひびくが、医学上の見地から保育衛生に特に意を用い、幼児各人の健康状態に即した教育をしたいという意にはかならぬ。この幼稚園は伊東の病院と隣り合せであり、また近くには内下の医師が数軒あり、衛生面の管理においては申し分がなかつた。またこの幼稚園の開設にあつては、保母たるべき婦人を豫め、当時幼児教育においては指導的な立場にあつた東京の二葉幼稚園に派遣し、そこに托して保母養成所に等はせるという周到ぶりを示した。この頃、伊東は長く県医師会の会長を兼任していた。三二年五月、県医師会は政府に對して、小學校の生徒入學前にあつては体格試験(検査の意が)相決)を行い、虚弱児童に對しては特別の學級を設けること、体育の専門教員の養成のため体育學校を設けることなどの提案を行つた。この反応について

は知られないが、伊東の児童体育に対する関心は並々ならぬもので、「体育に熱心な伊東医学士」の名は広く知られていた。ただし、伊東の主張する体育は、世間一般の通念のそれではなく、「養生主義」にたつた体育であることはいうまでもない。

「養生幼稚園」を創設した頃、伊東の将来への構想は、
状々なものがあり、

「養生会将来の隆盛は深く確信する所なり。養生大学、中学校、小学校の創設、養生銀行の設立、養生新聞の発刊、養生病院の建設は之を後人に委めし」として後進に期待するところがあつた。

「養生会」はその後も指導力ある伊東という傑出した人物を中心とし、「東門会」と「養生幼稚園」を主軸として順調な発展を示し、黒石や碓ヶ岡等の弘前周辺の町にも支部が出来、そこでも早起会がはじまり、今日に継続しているものがある。明治三五年、伊東は政界浄化をめざして政界入りを宣言したが、その頃から伊東自身は「養生会」指導の才一線からしりぞくことになる。永年にわたる「東門会」活動によってきたえられた中堅指導者は相ついであらわれ、運営に事かゝことはなかつた。伊東は大正二年、短期間ながら弘前市長となり、大正六年には政友会に入党し、その年の総選挙に立候補して代議士となつた。このような政治活動には潔癖なまでに清潔さを示したが、政治活動の中にとくに「養生理論」

をもちこもうとした意図は認め難い。本来、「人生いかに生くべきか」という素朴単純な人生訓、處生訓としての「養生理論」をさらに体系化して社会科学にまで高めようとしたり、又は政治的行動のためにそれを教條化しようとする試みは伊東の没後において現れるにしても、伊東自身は「養生会」による政治運動を意図したことはなかつたといつてよく、政治的活動とは明かに一線を劃していたとしてよい。

伊東の直接の指導を次才にはなれた大正期に入つては、「養生会」には次才にのびなぐみが見られることになるが、これは一には時勢のせいもあつた。本来、明治中期の弘前士族の子身の「人生訓」として形成されていつた「養生理論」はその頃の明治的雰囲気をも多分にたじよわせており、そのものとしての魅力は次才に失われていつたのもやむを得ないところであつた。「養生理論」の教示は、元来きびしい自己鍛錬と克己の途を要求するものであつた。それは、自らにうちかち、自らに戒律を課する鍛錬主義にほかならぬ。この肉体的にも精神的にもきびしい自己鍛錬の途は、かつての武士の禁欲的で戒律的な生活倫理そのものであつた。養体、養神こそまさにかかるものとして提出された。一方明治期に入つては、士族の生活に一大変動がおとづれたのであり、かつては身分的格づけにたつて保証されていた経済生活は根底からくずれざり、自らの自覚と責任とにおいて自己の経済生

活を生き抜かねばならなくなった。とかくこれにつまづく者が多かったこの頃、新たに着賊という、かつての武士にとって最もいやしいとされていた徳目が追加される必要があったのである。

「東門会」の早起会には十代の少年達が早朝曉をついて、冬はまだ足跡もついていない新雪をけてかけつけた。弘前においては、今日に至るまで老年又は中年の者の中には、かつて「東門会」の早起に参加した経験をもつ者は思いのほかに多い。ただこれを永続し得た者は眞に選ばれた少数者にとどまった。これへの出席において欠なしの連続百五十か月というような記録もあるが、これらは希有の例であった。このようなきびしい試練にたえ得た者は選ばれたごく少数にとどまったのもゞむを得ぬところであつた。このような自主的動機にたつ鍛錬主義は当然の帰着として少数精銳主義を結果することになる。かくて「養生会」とくに「東門会」は選ばれた少数者によって担われるという性格を当初からひめていたのであり、その主義において賛同し、これに後援をおしまない有志は多かつたにしても、その実践活動は、広く大衆化し、社会化する契機をもち難く、その限りにおいてそれは封鎖的な集団という性格をぬけ出すには困難な条件があり、自らそこには発展の限界があつたとしなければならぬ。

それにしても、「養生会」の実践活動は地元の住民各

層の間に永くさまざまな感化を及ぼして今日に至つたことは疑のないところであらう。終りに伊東の学友、入沢達吉による伊東重人物評をひいてこの小稿をおわりたい。

「伊東は東大の学生時代舜山と号していた。その頃官設の学生自治会なる同盟社というものがあり、故北里博士が社長で伊東はその裨將であつた。伊東は卒業後内務省に入ることになつてしたが、両親の希望により一切を擲つて郷里にかえり両親の膝下で考養をつくし一生を終つた。……彼は頼る眞摯の性質であつて常識に富み事務の才幹あり至極親孝行であつた。……その養生論は有名なもので、後には養生哲学という書に著わした。彼の墓（弘前市西茂森町南庭院——相沢）にも「養生院三力餘裕居士」と石黒子爵（忠憲、伊東の東大医学部における恩師——相沢）の筆で彫つてある。三力とは腦力・資力・体力のことをいふのでこれもまた彼一流の通悟哲學家から出たものである。」

入沢達吉 楓葉集（昭和一一年）。

筆者は「東門会」會員たる経験をもち、伊東重に直接に接したることもないが、今年には「養生会」創立七〇周年をむかえる。甚だ手薄で意にみだないが、いささか記念の意をこめてこの小稿を草した。

昭和三九年九月三〇日